

Kleist の オースタリー 遍歴

—1809年 5月～11月—

松 沢 芳 郎

ナポレオン帝国の転換期は1807年～08年であった。これ以後は征服、領土拡大となり、以前の革命の福音宣伝的意義を全く失ってしまい、世界の同情は薄れ、欧州各国民の離反も生じていた。そしてこの1808年にナポレオンは大陸封鎖令の完璧を期するためスペインのブルボン王家を廃し、自分の兄ジョゼフをたてた。スペインではそのため反乱が起りフランス守備軍はゲリラ的戦法に悩まされた。ここにまず反ナポレオンの口火がきられ、英国も海軍を上陸させてスペインを援助したのだった。

このスペイン制圧に兵を使うため、ナポレオンは1808年12月にフランス軍をプロシヤから広範囲に撤退させた。それで12月なかばにはプロシヤの不正規軍 Schill も歓声に迎えられて Berlin に入城し、プロシヤ王も Stein 男（まもなくナポレオンの追放令でロシヤに逃がれた）さえも首都に帰還することができた（K の「An den König von Preußen」はこの時プロシヤ王に捧げられた詩である）。

こうした北ドイツにおける敵愾心の昂揚により、プロシヤが小規模ながら軍隊を整備し始めてきたので、ライン同盟（1805年のプレスブルクの和約によってライン同盟は有事の際ナポレオンの為に六万余の軍隊を動員する義務を負わされていた）の Bayern, Sachsen の諸侯が依然としてナポレオンの側にたっているにも拘らず、オースタリーは軍隊を近代化し、増大させ、開戦すればナポレオンに対する緒戦の成功で北ドイツ諸国の応援を得て一挙にフランスを粉碎しようと願っていた。

実際オースタリーはこの時四度目にナポレオンに対して立ち上がったのだが、結果はついにまた敗れ、ナポレオンの請を容れて皇女マリアを与えねばならなかった。これはプロシヤで指導者の Stein 男がナポレオンによって放逐されたので、北ドイツが統率者を失ったため呼応する機会を逃がしたのも一因である。

1809年春オースタリーはナポレオンに対する新たな戦の準備をし、Dörnberg は Westfalen で蜂起し、Schill は Berlin に出征軍を集結していた。そして4月9日チロールが突然蜂起し、兵火が四方八方へ飛び、決戦が避けられない状態になり、オースタリーの対仏宣戦布告もなされたのだった。

この戦争勃発時に Dresden で作られた K の歌「Germania an ihre Kinder/Ode」（これはその後何度も書き直されたりして七つの異った草稿がみられる）、「An Franz den Ersten, Kaiser von Österreich」、「Kriegslied der Deutschen」がある。これらはどれも自筆原稿として残っている。そして「オースタリー皇帝、フランツ一世に捧ぐ」の題の後には「1809年4月9日、Dresden で Heinrich von Kleist によって歌われる」〔Tieck の初版本では1809年3月1日になっているが〕とあるし、脚註には「この三つの詩句は、これを印刷しようと思う人には誰にでも作者はゆずる、そしてそれが別々に印刷されて早く広めさせ

る以外に何も望んでいない。H. v. K.」とありまた K は「その詩が貴殿のお気に入りなれば、公刊すべく、あるいはただ一つでも（小生がもっと集大成したものを出版しようと思っておりますので御心配なく）印刷すべく植字工か貴殿の思う人に与えて下さい、小生が粗綱あらがねの声を持っていて、それをハルツ山から取出してドイツ人に歌って聞かせたいと思っています」（B149）⁽¹⁾と言っている。このほかにこの頃作られた詩に、二つの Epigramm (Rettung der Deutschen, Die tiefste Erniedrung) と「Das letzte Lied」がある。

このオースタリー宣戦の緒戦の状態を K の手紙は次のように伝えている。「さしあたり我々はフランス人からここ [Dresden] では免れております。オースタリー軍が戦いotta 勝利の最初の知らせ [オースタリー軍 Bayern に侵入=4月9日] に Bernadotte [, Jean Baptiste: ナポレオン軍の元帥= Sachsen は B.のもとにドイツに反抗していた] はすぐさまザクセン軍を率いて Dresden を去り [フランス軍は4月9日に Dresden を撤兵], 彼の敵がすぐ後にいるかのよう、慌てていました [オースタリー大使館も4月9日に Dresden を引きあげる]。運搬できぬ加農砲や弾薬車はこわしていきました。兵団の進路は Altenburg を目指し, Davoust [, Louis Micolat: フランス元帥=1806年以来 Auerstädt 侯] と合体するのでした, でもオースタリー軍がいくらか進軍すれば遮断されています。王と王妃 [Marie Amalie] は車に乗った時大声で泣きました [ザクセン王夫妻は押しよせるオースタリー軍を前にしてナポレオンの要請でフランクフルト/M に安全を求めて行った, もともとザクセン王 Friedrich August I は始めはドイツにおけるプロシヤの覇権を必要と認めていたが, Leipzig の戦の後, Sachsen の滅亡を救うためライン同盟に加入した]。 (B 149) そうしてフランス軍の指導によるライン同盟軍の「ザクセン軍は勢にのって突然 Plauen へ, そこから Zwickau へ進軍したとの噂です……プロシヤでは非常に急速に全てのことが戦時体制へと移ってきました [プロシヤは参戦しなかったが, 4月9日に一応動員している]」(B 149) という次第である。

こうした急激な状況の変化にも拘らず, K はかねてからの計画の Wien への旅行を行うとする。勿論「Hermann 戦争」の上演を目指して, 愛国的情熱に燃えていたにしろ, 月末までに順をおって Wien 旅行の準備をしている。即ち4月14日に Dresden で, やってきた U に会っている, 勿論旅行に出るための経済的援助を願ったのだが, ままならず, その結果「僕が貴姉に言ったように一緒に旅行しようと思った B [uol-Mühligen, Joseph Baron von: 1801年来 Dresden のオースタリー大使館書記館] はすでに去って」(B 150) たので, Dahlmann と「4月29日に Dresden を去る」(B 150) ことになった。

この Dahlmann は後に歴史家になったにも拘らず, この頃の K との旅行について述べた「自伝 (1849年=L 316)⁽²⁾」と「J. Schmidt に宛てた文 (1859年=L 317)」の間には細いところでは相当食い違いがあってはっきりしない。しかしこれから推量していくと, もともと A. Müller のさそいによって Dahlmann は Phöbus に参加すべく Dresden へ出てきたのだったが, 時すでにおそく Phöbus は瓦解し始めており, そのため上流階級の中で講演する仲間に入ろうとした。ところが戦乱勃発の気配でそれも駄目になり, その時たまたま, Phöbus の画家の F. Hartmann と知り合いになって, それによって K と知り合ったとのことである。即ちある日 K と一緒に Hartmann と Dahlmann がいつもの会合地 Dresden 橋上で出会い, そこへたまたま Böttiger がやって来た。Böttiger と Hartmann がおしゃべりをしているのに待ちくたびれた Dahlmann と K は二人を残してそこを去

り、近くの店で色々と話をするようになった。〔Dahlmann の文によるとどうもこれが初回だったらしい。〕その話の結果二人は意見が一致し、「翌日徒歩で Dresden をたつてオースタリーに旅行しようと申し合わせた」(L 317) のだった。

K は「貴姉〔U〕も御存知のように僕を直接にせよあるいは間接にせよ、事件の流れの中に投げ入れる意図で D〔resden〕を去った」(B 153) のであるが、まず「Böhmen へは軍隊の後についていった」(L 318) のでありその軍の中には旧友 Pfuel の弟がいた。

この時の Dahlmann と K らの「計画は Böhmen から凡ゆる力を結集して、オースタリー戦争からドイツ戦争が起るよう努力することだった。我々が一時的な成功の希望に欺されぬようにと、我々はオースタリーからはただ敗戦したにも拘らず、持ちこたえることを望んだ、そして Stadion 兄弟〔兄はオースタリー外相、Wagram の敗戦後 Metternich にその地位をゆずる〕の態度で、国家が今度は決戦を挑もうと決心したのを認めることができた。しかしオースタリーがそうであれば、プロシヤもその興亡の屈辱的な動揺から突然奮起するだろうし、しかも他のドイツはオースタリーとプロシヤの一致した鷲の旗印に従うだろう」(L 316) と考えていた。

二人は「直接あるいは間接に事件の流れの中へ身を投ずる為に4月9日におこった戦争の、Sachsen がフランス側についてオースタリーの事件を積極的にすすめるために Dresden からオースタリーへ行った。彼はオースタリー側の成功が明らかになるとすぐ対ナポレオン戦参加にプロシヤを動かそうと願っていた北ドイツ愛国者同盟の中にいた」(S. 183)⁽³⁾。

そして K 自身も「全てが、当時それほど調子が良かったので僕は Dresden に居られると信じていました、でも最近の事件はこの地から去ることを僕に強いました。僕が今実際にこの国で為すだろうことはまだ判りません、時がそれを解決するでしょう、そして貴姉がその後にお知りになるだろうと思っております」(B 150) と述べ、「僕が近いうちに再び Dresden へ帰るかどうかはまだ僕にははっきりしていません」(B 150) と言っている。

途中では先行していた Buol について「この Töplitz でも僕は彼〔Buol〕とも出会いませんでした〔5月3日〕」(B 150) し、「Buol 氏の友人である v. K や v. Dahlmann 氏も明日急行郵便馬車で出発します」(L 325=5月3日) と記録されている。この時「今のところ僕は Prag を通って Wien へ行く」(B 150) 予定であったが、Prag の政府役人 Breinl の報ずる (L 326=Prag, 1809, 5, 5) とくところによれば「K……は作家です……彼は Dresden のオースタリー大使から Wien への旅券を、彼の愛国心をもっと支持され成果をうるその地で有利に働けるよう、もらっております。たまたまおこった病気が彼の出発を今まで妨げました」とある。

また「1809年 Heinrich は Hermann 戦争を上演させるため Wien へ行こうと思っていた、だが Wien のすぐ手前で彼は15分前からフランス軍が進入したと聞く。——彼は引きかえして Prag へ行った、そこで彼は仮綴じの本を出し、それが非常な反響を呼んだという話がある」(L 323)。また Tieck も K は「作家として良い作品に役立てる目的で Prag へ行った」(L 324) と述べている。

5月5日に「Prag で二人は大分前に先行した Buol に追いつく」⁽⁴⁾。そして「オースタリー大使館の旅券の助けで……境がすでに閉じられていた時、幸いにも宿を見つけた、この町には当時ドイツの再生をあえて信じようとした者全てが流れこんでいた」(L 316) のだった。

実際 Regensburg の日以後、高まってきた焦燥感は Dahlmann と K を Donau 河の近くへ駆りだした訳だが、「我々がオーストリア軍の管区に入った時、Jena からきたプロシヤ軍がそこで凡ゆる点において憶病者、弱虫と侮辱され……上部ドイツ人はフランスへのドイツの裏切者と実に侮辱されていたのだった」(L 316)。二人はそれを見るにつれ、「時がたつにつれ、我々は Wien へ旅行しようとして決心して、そして Regensburg の勝者が我々より早いだろうとは疑わなかった」(L 317) のであった。

Znaim で二人は Knesebeck と弟 Pfuel に会って、「Znaim で我々は後々軍人として最高の榮譽に昇進した Knesebeck [Karl Friedrich v. dem (1768～1848)] プロシヤ大佐と出会いました。Knesebeck は当時オーストリアの Karl 大公を通じて行われたが、しかしはじめはうまくいっていなかった宮廷の秘密の交渉を任せられていた」(L 317) と報じている。

それから K は Dahlmann と Stockerau に更に進み、一方 Knesebeck は Prag へ引きかえし、そこへは弟 Pfuel がまもなく追っていく筈だった。

それ故 5月31日に二人は Prag へ帰ったのだから、弟 Pfuel が受取った K の 5月25日付の書簡 (B 151) は「1809年 6月 1日、クライストの帰還後に受取る」と記入してある訳だろう。

K は「問答示教書」をこの頃 [CHV 全集では Regensburg の会戦 (1809年 4月23日)後、しかしおそらく Aspern のオースターの勝利 (1809年 5月22日 以前) 書いたというのが通説だが

『14章 問 オーストリア皇帝や真のドイツの王侯方に忠節を尽している官吏たちは、危険な立場にあると思わないか？ どうだね？

答 本当にそうだと思う。

問 何故？

答 若しヨルシカの皇帝が国内に這入ってきたら、忠義であったが故にひどい目に遭わされるでしょうから。』

とあるから 5月13日の Wien 占領以前と考えた方がよいのではなからうか？ 当時の情報伝達の手遅れやそれによって時局を判断する時間を考えると Regensburg の戦より一週間位後より、オーストリア軍が圧迫されて戦場がオーストリア国内に次第に移ってきたもののそれほど Wien に近くない頃、五月の初旬ではないかと考えられる。即ち K の Prag 一時滞在の頃と考えられる。

この間 5月13/14日に Wien がナポレオンに占領されたが、二人は Prag から Wien への途中にいた。その後 5月21日には Groß-Engersdorf bei Aspern がフランス軍に占領されたが、しかし翌日再び放棄されて、この Aspern の戦の戦外にあった (CHV 全集註)。K たちが「ちょうどある早朝、Stockerau でカルタをしていた時、宿の主人が我々のところへやってきた、≪皆様、カルタをおやりになって戦争が始まったことは何もお知りになりませんか？≫それは Aspern の戦 (5月21日)だった」(L 317)。彼らは早速観戦に出かけたが、「僕が22日に [Gross-] Engersdorf で自分で見たことの記述全部の手紙」(B 151) とあるように戦の及ばぬところで戦全体の様子を見ていた訳だろう。そしてこの22日に見た戦争の報告を Prag の Kolowrat 伯に出している。それは結局は Knesebeck に知らせる意図であったらしく、「でも Knesebeck がそれを取りにいかせ開封するように、Knesebeck へ書いて下さい。その中の多くのことが彼に興味があるでしょう」(B 151) と言っている。これは23日に出したものとみられるが、同時にはっきりするのは Knesebeck に知らせるため、弟 Pfuel へ23日に Znaim 宛に書いたと同じような内容の手紙があった

ことである。これはしかし「Znaim からきた誰かが僕に君〔弟 Pfuel〕がそこから出発しただろうといったので、残念ながら君は僕の一昨日〔5月23日〕の第二の手紙を受取らなかったでしょう」(B 151=5月25日)と言っているように Pfuel の手にうまくはいらなかった。そして5月25日には K は「ちょうど僕が新聞からほやほやで、陸軍少将 Radetzky 伯〔Joseph (1766~1858): 後に元帥〕のもとから入手したことをお知らせします」(B 151)という書き出しで始めている。

おそらく Aspern の勝利のオースターリー軍の軍事情報だろうが、これを最右翼の第五軍団の指揮をしていた R 少将から K は得たのだった (CHV 全集註)。

そしてこの Stockerau で手紙を書いた後で、二人「Dahlmann と僕は戦場へ、即ち Kakeran と Aspern へ、全てを見、そして事件の成行を調べに行」(B 151)くのである。K はその夜は Langen-Enzersdorf へ泊る予定 (B 151参照) でいた。

「会戦後の〔3日後の〕日に我々は戦場を訪れた、宿の主人は我々に馬車を整え、我々を自分で案内してくれた。何かのんびりした気持を我々は恐ろしい破壊のこの光景に感じていた……誰も我々が戦場を巡っている間邪魔しなかった」(L 317)、一人の農夫への不注意な質問で二人はいわゆるスパイとして逮捕され、K は「1809年3月に戦争の勃発がためらわれた時」という註づきの「An den Erzherzog Karl」を読んだりして弁明したが聞かれず、オースターリー軍の Markgraf-Neusiedl 司令部の Hiller 元帥のところへ連れていかれた。Hiller 元帥は「すぐ勝手が判ってくれて我々の新戦場への遍歴をいくらか無鉄砲とみるという親切な言葉で迎え」(L 317) 釈放された。宿の主人がこの間に馬車に乗ったまま逃げだしていたので、彼らは死ぬほど疲れきってかなり離れた Kageran 村に宿を探さねばならなかった。〔この間のくわしい成行は L 316, L 317 に書いてあるが殆んど同じである。〕

しかしこの時、オースターリー軍の将校の前でポケットから取りだして読んだのは「1809年5月21/22日の Aspern の会戦後に」と註付きの、K がこの戦の最高殊勲者をたたえた「An den Erzherzog Karl」であるかもしれない。日付の点からみても完成しているだろうし、ポケットから取出したという点からみてもこちらの方が妥当かもしれない。

こうした Aspern の戦場での不幸な予想外の寄り道をした後で、K は「とりかかったあらゆる手段にもこの非常に奇妙な方法で邪魔されて、僕の望みでは全然行きたくなかったこの Prag に僕はやむなく滞在しました」(B 153)と伝えるように、Prag に5月31日に帰ってきたのだった。しかし「ここ〔Prag〕では B〔uol〕によって、また彼が僕に世話した知人たちによって、僕にとっての活動範囲が開かれるように見え」(B 153) たのだった。

「Wien へ行く代りに Dahlmann と K は Prag へ行った、Böhmen はフランス軍に対してまだ安全な中部ヨーロッパ唯一の土地だったからである」(s. 91f.)⁽⁵⁾。一方6月10日には「Sachsen に侵入したオースターリー軍団の総司令部は Dippoldiswalde に来」(B 152) であり、それに対して Dresden をオースターリーから守ろうとした「Dresden で指揮する Thielmann 〔Joseph Adolf (1765~1824) = K が Körner 宅で知り合った大佐〕は Sachsen に激烈な布告を出し」(B 152) ている。また Herzog v. Braunschweig Friedrich Wilhelm (1771~1815) の率いる「Braunschweig 軍団〔Schwarz Schar〕も Sachsen に、〔Ernst v. Pfuel の勤務する Franken 軍団の〕少佐 Nostitz 〔Karl v. (1781~1838)〕はその部隊とともに Bayreuth に侵入したのだった。この移動は Schill をおそらく助けることができる〔Schill は5月31日にすでに Stralsund で戦死していた〕はずだった。Schill はフランス軍の Gratien 将軍の前で Stralsund へ撤退し、Rügen 島へ行くため船に乗った。九百人のデーニン人が Gratien 将軍と合一しました」(B 152) といった風に Aspern の戦におけるオースターリー

軍の優勢によってナポレオン側の Sachsen を中心とした混乱の様子が K によっても語られている。それ故こうした状況からこの Böhmen の Prag は K の愛国運動と愛国的作品を作ろうという目的に当時としては最もふさわしい町だったのだろう。

この Prag の Kleine Seite, Brückengasse Nr. 39 の下宿で Dahlmann は「K の詩に慣れました、その詩では私はその時まで断片 Robert Guiskard にとくに親密さを感じていましたが、その時 Hermann 戦争の手稿が、崇高さ、荒々しさ、心底を掴みとる、時には感激に高めるものを含むあらゆる物で私の目の前に現われてきていました。しばしば私は彼にその一節を朗読せねばなりませんでした。本当に私はしばしば、他の人が傍にいても朗読を勤めました、というのは K 自身が彼のふくみ声やその性急さで簡単に叱ってしまったので自分で朗読するのが好まなかったからです、しかし個々の文節を彼がそのような反抗しがたい声の心の響きで読んだので、それはいまでも私の耳に響いています」(L 317)。(その文のあとに Hermann 戦争についての意見も述べているが) そうした詩作の日々もあった訳だろう。

また Dahlmann は後に Gervinus に [Jena, 1840年10月26日付の手紙] 言っている、「彼の一番すぐれた作品を私は少くとも上述の Hermann 戦争だと思えます。それは同時に歴史的価値を持っています、ずうずうしいライン同盟の精神が、当時支配していたように適切には全く画かれることはできない。当時誰もが、最後に死にいらされる Aristan 侯が誰で、重要な行為や使者の派遣で祖国を救おうと考えた人々が誰だろうという事情は知っていた。——印刷は 1809年などでは全然考えられなかった。君は私が Ventidius の雌熊にいくらか同意しなかったと考えることができるでしょう。K は異議を唱えていた、『私の Thusnelda は勇敢なのです、しかしフランス人に尊敬の念をおこす今日の少女のように、無邪気でうぬぼれが強い、そのような性格がもたにかえるには、いくらか恐ろしい復讐が必要なのです』と」(L 319)。

「フランス新聞学綱要」にみられるように新聞、雑誌による愛国心鼓吹と、正しい報道伝達を考えていたが、Prag での K は「Germania」誌を計画したのだった。「それまでの旅行中《Satyrische Briefe》や《Kathechismus》のような論文はすでに書きあげられていた」(s. 183)⁽³⁾。そして F. Stadion 伯のまわりにくる愛国者たちに、K は Buol によって紹介されたのだった。「5月21/22日後はすばらしい時期でした、そして僕は愛国的週刊誌のために決めたいくらかの論文を〔愛国者仲間がおちあっていた〕Graf v. Kollowrat [市守備隊長 Franz Anton Kolowrat-Liebsteinsky] の家で朗読する機会を得ました。この週刊誌を成就させる考えが賑やかにもたれ、他の人々は僕の代りに出版社を見つけることを計画しました、そして考えられた当局の同意〔6月17日にこの請願は上申されました(L 328 c 参照)] を得ねばならないことを除けば何も欠けるものはありませんでした」(B 153) と K 自身も語っている。

K が当時またその後にも書いたもの全てが、彼が Aspern の戦場からの手紙に述べている調子がみられた、即ち「今僕は一瞬ももはやプロシヤ王が、そして彼と共に全ドイツがたつて、そして必要な大仕事に備する戦争がおこることを疑っていません」(B 151) といった次第である。

[Teplitz の警察高等警部] Eichler が「市守備隊司令官 [Kolowrat] は作者として有名な H. v. Kleist なる人物が北ドイツに働きかけるため Germania という題名で雑誌を出版しようと思っていると言及」(L 328 a) しているのを記録しているが、Dahlmann と K

とが「雑誌，あるいは実際は週刊誌を Germania という題で出版してもよいという許可をうるために提出した請願」(B 152=この請願書は紛失：E. Schmidt の Kleist 全集，Bd. 5 (1906)，s. 389 註)は「この雑誌が包含しているものを君 [F. Schlegel] は簡単に考えることができます，今ドイツ人が記さねばならぬことが題材です」(B 152)，そしてまた二人は「我が国の作家に，そして北ドイツ人たちに，彼らが国民に言わねばならぬことを危険なしに小生の雑誌にのせる機会を作るその門戸を開く以外には何も望んでいない」(B 152)のである。こうした精神のもとにできたのが Einleitung [Der Zeitschrift Germania] である。

こうして Prag で6月12日に，K の「Germania」の出版請願が Böhmen の総代官 Wallis [Josef Graf v. (1767～1818)] のもとに出され，それが外務大臣に提出され皇帝の裁可をうける手筈が決められる。それ故6月13日 Kleist の請願は Wallis の「同封物から閣下は作者としては知られていないこともない，そして Dresden のオースタリー大使館の元書記官，即ち Buol によって特に推薦されている v. Kleist 某が，その傾向が北ドイツに向けられているという「Germania」の題名で雑誌を出版しようと思っていることが御賢察なされます。閣下は特にこの意図を了とされ，そして私がこれに関して皇帝の意向の開陳を願うことの履行を私に命ずる最大の動機がここに生じますなら，私はおそらくこの件に同意するのをためらうよりも，原稿はもともとその度毎に検閲官庁に提出せねばならぬものでしょうと申し上げるだけです」(L 328 b)といった添書 [Prag, 1809年6月13日] をつけられて Wien の外務大臣 P. Stadion のもとに提出される。

K は一方6月13日 Brückengasse 39 [「Prag では我々は素人下宿の隣りあった二つの部屋を借りました，それは Moldau 橋から数軒先の裏町で喫茶店に向いあっていました」(L 317)] から，[1801年11月29日に Frankfurt/M. から「F. Schlegel とその許嫁 (Drothea) によろしく」(B 56=Adolfine v. Werdeck 宛)と書いたことがあり，それ以後も交際があったと思われる] F. Schlegel [当時 Wien でオースタリー政府の官房書記官になっていた] に Wallis から Stadion 伯に請願書が出されたと述べ，「v. Dahlmann と小生の二人は [Stadion] 伯のもとで，好意ある君のとりなしで，問題となっている許可を得るためにいくらか必要だろうことをして，しかも事情が許す限り早めに貰って下さることを君にお願いするよう意見が一致しております」(B 152)と請願への援助を求めている。

この F. Schlegel には更に「我々が本屋の申し出で，かなり，他の本屋と同じ位うまく報酬を支払うことができるでしょうから，その執筆を，少くとも一つは予め贈って下さることを頼んでいる。

こうした Kleist の請願書を受取った Stadion 伯は皇帝に6月17日に提出し，同日 Wallis に返事を Wolkersdorf から書いている，「政治雑誌を出すという Kleist 氏の提案を私は陛下に裏打ちしました，そして時宜をえたら陛下の決定を必ず閣下にお知らせ致します」(L 328 c)と。

しかし政治的にみて1809年7月5/6日オースタリー軍が Karl 大公指揮下における「Wagram の軍事的敗北は一瞬のうちに解放への希望すべてを瓦解させるようにみえた」(s. 91)⁽⁵⁾。愛国者仲間が Aspern での大公の勝利(5月21/22日)で掴んだ希望はそれで直ちに幻滅を感じさせられたのだった。この Wagram の戦は K にオースタリーの軍事的

指導力の怠慢、政府の処置の不充分さを気付かせ、特に精神的基礎づけと目的意識性に目を見開かせた。こうした見解の下に K の「Über die Rettung von Österreich」ができたのだ。Wagram の敗北後、オーストリーでは平和党は降伏にと、一方外相 P. Stadion 伯側の人々はまだ戦争継続を主張していた。

Stadion 伯側の人々は Prag に強力な後援を持っていたのだ。「そこでは当時、ドイツの再生をあえて信じようとしたもの全てが流れこんできていた」(L 316)、即ち Hessen 人、Braunschweig 人、Preußen 人など。これらの人々は Prag で外相の弟 F. Stadion 伯のまわりでオーストリー人と同意見の仲間だった。

7月12日の Znaim の休戦は四週間の休戦期間を決めただけで、事態は必ずしもナポレオンに有利でなく、プロシヤ王は以前よりもこの戦に干渉しようという気になり、平和党は優勢だった。それ故「Über die Rettung v. Österreich」は「疑いもなく Wagram 戦後に書かれた」⁽³⁾。そして F. Stadion の9月13日の手紙にも「《Über die R. v. Ö.》の論文が八月末あるいは九月初めに書かれた、それは Böhmen に対する第四節の註も関係していると確言してもよいだろう」(s. 185)⁽³⁾と言っている。

「最初の稿と改稿の間には、いわば、ただ短期間があるだけである。おそらく Kleist は手稿を友人達に朗読し、友人らがこれを過激だとした時、新しい稿に取りかかったのだ。改訂稿がそれほど断固たる手段に訴え、一方慎重な立場でとりかかれたことは、公開が「Germania」でも、ちらしでもどちらにでも目論まれていたからと結論される」(s. 185)⁽³⁾といわれている。

いずれにしろ愛国者たちの希望は消え失せた。いずれにしろ戦〔7月6日〕は敗れ、更に悪いことには休戦〔7月12日〕が今度もただ王家のためだけで、忠実な国民のための戦ではなかったと知らせたのだ。結果として Prag は避難所となってしまった。それは K の計画外のことだった。しかも K が Buol を通じて知りあった v. Kolowrat 一家の邸宅で計画し進行させていた週間誌の計画を Wagram の敗北は全く駄目にしてしまったのだ。

7月17日に喫茶店で手紙を書きながら、姉に自分のまわりの事態の急変や彼の物質的生活のそれによって生じたあやうさに深い衝撃を受けたことを述べている。「今や最近の突発事件はただこの計画〔Germania〕を水泡にただけではありません——それは僕の活動力をもまた水泡にしてしまうのです」(B 153)。しかし「僕は今後どう気持ちを落ち着けるべきかを言うことが全然できません。僕は Gleißenberg [、Karl von (1771~1813): 1804年に K の従妹 Karoline v. Pannwitz と結婚した、そしてこの頃 Berlin に住んでいた] にいくつかの古い原稿〔「Hermann 戦争」と「Käthchen」〕を売るように手紙〔この手紙は残っていない〕をだしました〔7月14日からこの手紙を書いた7月17日までの間に?〕、でもその一つは時世との関係で出版社を見つけることは難しく、他の一つはそうした関係がないので殆んど興味を持たれないでしょう。端的に言うと、姉さん、詩作の全仕事が僕におかれています、というのは、僕は僕がたとえ立ち上ろうとも、ちょうど貴姉に話した二者択一の中にいるからなのです」(B 153) といって、詩作は忘れないでいる。実際「Wien 占領以来 Hermann 戦争の上演はもはや考えられず、印刷はその作品のその時代向けの傾向を持っていたため不可能であった」(s. 92)⁽⁵⁾のだ。

Genz は Prag の Kolowrat 伯 (市守備隊長) に新しい「状態を報告し、オーストリー

軍の新しい司令官 Lichtenstein 侯に、侯が Karl 大公よりもっと多くの活気と主導性を示すように述べている、「半ば勝利、半ば敗北が現在ではもはや問題とならないでしょう」(6)と。

こうしたこと全てが K の希望を再びふり立たせたに違いない、「というのは Gents から手紙を受取った後、F. Stadion は兄に手紙を書いた」(s. 185)⁽³⁾のだった。

この F. Stadion の手紙は「当時伝わっていた噂、K が長く Prag で病んでいて全く死んでしまったという噂を弱める」(s. 185)⁽³⁾のである。

ところが Germania 発行はなかなか裁可にならなかったらしく、弟 F. Stadion 伯は兄 P. Stadion 伯にその件で1809年9月13日に手紙で Prag から依頼している。これは「私はここに更にもっとくわしい註を敢てせねばなりません」と F. Stadion 自身がことわっているように、当時のオーストリーの報道関係の説明がなされている；

「オーストリーの新聞が Ofen [現在のブダペストのこと] で編集されて以来、どんな場合も当地 [Prag] では非常におそく到着せざるを得ないため Böhmen や Mähren 地方の人たちは皆全く情報なしであります、そして外国は我々の側から一言も言われぬことに慣れてしまいました……再び始まった戦争に際して [それ故] Prag Zeitung を利用するのは、それによって知らせようと思う報道を必要だと思われる決済のように公けにするため非常に必要 [でしょう]。これによって国内の民衆が十分に教えられるだけでなくオーストリーの宮廷の体制によるそのような見方が国外へ持ち出されるだろう。[しかし Prag Zeitung が] その空疎な内容のために国内でも国外でも興味をひかないので……その新聞にすでに現在いくらかもっと仕事を与え、それが少くとも外国の新聞にすぐのっている事実をなんら熟考せずにとただそのまま並べ、そして国内における非事実の報道を温和な調子でとりかかるとをひき起こさせるのは必要だろう」(L 330)。

そして「この機会にあたり閣下に次のことを思い出して下さることをお願いします。Kleist 某が当地で Journal を書く許可をお願いしたこと。総代官 [Wallis] 氏は反対ではありませんでした、閣下はすでに Wolkersdorf でこの点には同意を明らかにされました、一方ここで保証を自分に得ております H. v. Kleist はまだ許可証を入手していません。現時点においてこの点に関して最高の決定をすべき時だろうと思われます」(L 330) と言っている。

一方政治面ではオーストリー皇帝自身は Wagram の敗戦後武人らしく考えていて、ナポレオンの講和条件が拒否された後、新しい事態のために自らの声明を起草していた。Stein 男は Troppau からの Stadion への回想録と、——常に変動しながら——九月の第二回にはもう避けがなくなった戦争再発の Gents の計画の中で「ドイツ皇帝に守られたドイツの同盟」をプロシヤ王の義弟でその当時オーストリーに勤務していた Wilhelm von Oranien 公子を先頭に立てて行うようにと意見を述べていた。

こうした状況に例のように「K はひどい病気にかかってしまった。感情の昂りが、再び世界の崩壊によってあらわれたのだ。Prag の Barmherzig Brüder 僧院で彼は何週間も養生させられた。一方 Berlin の彼の知人は彼を失踪したか死んだとしていた。彼の一生のこの数ヶ月については何もはっきりしていない」(s. 100)⁽⁵⁾。全く九月初旬 Berlin で実に A. Müller により、Prag の病院における K の死の噂が拡げられたのだった。

「H. v. Kleist は Wagram で得た傷で死んだ筈です」(L 331 b=Theodor v. Schön 宛 J. G. Scheffner, Königsberg, 1809年9月5日)。その他 L 331 a, c, 332 に同じような知らせがある。

だから実際は「いつもそんな時に病気になるように、伝えるところによれば K は数ヶ月 Prag で病気で寝ているという話」⁽⁴⁾だったのである。

こうして10月30日になって、Böhmen 州政府の事務記録 (Prag, 1809年) によれば、「H. v. Kleist と Dahlmann の Dresden への旅券の手続き」(L 333) がなされている、そして K は1809年の小詩と二、三の愛国的散文論文を「Prag から Frankfurt/O への旅行の途次 Dresden での滞在中、Hartmann 方に1809年11月始めに残していったのだった」(s. 171)⁽³⁾。こうして11月になって漸く再び Frankfurt/O にやってきて、それからもう一度オーストリーや南独への旅行を計画するが、1810年2月再び Berlin へ来て、彼の生涯の最後の期間を過ごしたのだった。

註

- (1) H. Sembdner: H. v. Kleist の CHV 全集 (1965年, 第4版), II の書簡番号. 以下同じ.
- (2) H. Sembdner: H. v. Kleists Lebensspuren, 2. Aufl. 1964の引用番号. 以下同じ.
- (3) R. Samuel: Zu Kleists Aufsatz <Über die R. v. Österreich>. In: Festschrift f. Ch. Wegner zum 70. Geburtstag am 9. 9. '63., 1963.
- (4) F. Koch: H. v. Kleist. 1958.
- (5) C. Hohoff: H. v. Kleist in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. 1958.
- (6) Steins Brief an Gentz vom 8. Sept. 1809.